

博士論文概要書

李贄における〈断絶〉と〈継承〉

阿部 亘

目次

序説

第一章 言語観

第一節 言葉という陥穽——言語のよそよそしさ

第二節 読むことと学ぶこと

第三節 書くことと教えること

第二章 師弟観

第一節 師になるということ——自任への批判

第二節 弟子になるということ——好学から奔走へ

第三章 死生観——死へのおそれから死の選択へ

第一節 死を恐れることと名を好むこと

第二節 死を無化する原理——如何に死への怖れを超えるか

第三節 死を前にした実践——死に意味を持たせること

第四節 死者としての自己——書物に潜む死者

第四章 人物論再考——歴史への自己投影をめぐって

第一節 歴史への自己投影

第二節 情況という重力

終章 時と出逢う言葉たち

第一節 越境する言葉たち

第二節 時と出逢う言葉たち

おわりに——言葉の海で

本論考の目的は明代後期に独自の思想・文芸批評を展開した李贄の思想について、その基盤となる構想を〈断絶〉と〈継承〉という視点を糸口として論じることにある。

李贄は既成の儒教に対する痛烈な批判者として知られ、また当時必ずしも評価を受けていなかった小説や戯曲などの通俗文芸の擁護者として著名である。度重なる迫害と、その果ての自殺に終わる彼の特異な生涯は、人々をして容易に抵抗や叛逆という言葉を想起せしめる。この思索者を語るにあたって、〈断絶〉と〈継承〉なる主題をつけることは、奇異に聞こえるかもしれない。彼は伝統から離脱したが故の異端＝異人ではなかったのか。伝統の破壊者ではなかったのか。

本論考はこうした通念に否を唱えるものである。なるほど、この男の生涯は烈しい。伝統の鋭い批判者であったことは疑いを容れぬ。だが、彼がその倔強故に伝統を全く放棄したか

といえば、それは否である。これはよく言われることだが、李贄は決して孔子の批判者ではない。彼のなかで孔子は尚も偶像である。その最後の著書は四書五経のひとつ『易』の注釈書であった。その言説はあたかも伝統への拒絶と渴望に引き裂かれているかのようである。

拒絶と渴望——この分裂をもたらしたものこそ、その深層にあった〈断絶〉と〈継承〉をめぐるラディカルな問いだったように思われる。我々は正しく〈継承〉してきただろうか、我々の目の前にあるのは〈断絶〉ではないのか——この問いは極めて伝統的な問いではある。だが、李贄の激烈な言動の底流をなすのは、この伝統的な問いを彼なりの仕方と徹底的に突き詰めていった思惟だったのではないか。この論考の狙いは、彼の思索を地下茎の如く貫く〈断絶〉と〈継承〉をめぐる問題系が彼の思想に如何なる意味を持っていたかを明らかにすることにある。

第一章 言語観

〈断絶〉と〈継承〉という問題を考えるとき、言語をめぐる思索はその核心をなすものといえよう。言語とは何か、言語は如何に機能するのか。尤もこうした問いは、近世以降の儒学において通奏低音のように響いてはいたものの、前景化されては来なかった。これはある意味当然の事といえよう。近世儒学における最重要課題は人倫道德の実践にあるのであって、このような思索はあくまで経学——古来より伝わるテキストを如何に読み解くか、それも如何に人倫道德と関わるかたちで読み解くかという主題に付随するものに過ぎなかったからである。

だが、李贄については、事情が些か異なってくる。彼は現状に対する痛烈な否定、批判の思想家としてみられているが、そのなかには言語に対する否定、批判が多分に含まれており、その仕事の骨格をなしているように思われるからである。

言語をめぐる彼の立場は極めてアンビバレンスなものであって、否定と肯定の両極に振れ、名と実、内と外という軸をめぐる錯綜している。近世の儒者達にとって、言語の積み重ねが必ずしも〈継承〉を保証するものではないことは、既に見た通りである。だが、李贄にとって言語はより積極的に〈断絶〉をもたらすものである。言語は人を執着させ、本来の認識と判断を失わせる。内なる純粋性を失わせるのである。しかし、李贄は言語による伝達の可能性を全く見限るわけではない。この章では彼の言語批判と、彼の考える言語が意味を持つ条件を分析し、その言語観の構造を明らかにする。

第一節 言葉という陥穽——言語のよそよそしさ

李贄は言語を虚構的なものと見做している。ものにつけられた名とその対象の関係は恣意的なものである。言語と意味の関係は曖昧で錯綜しており、虚構的である。そこでは本質や価値の在処が見失われている。だが、人は言語に動かされる。本質的なものを忘れ、現実を見失い、言語の秩序を生きる。如何にも危険なことではないか。これこそ、彼の言語観の

基調をなす言語理解といえよう。

現実と乖離した言語は価値判断に介入し、さらには言語活動の主導権を握ってしまう。そうなれば、人が本来生まれながらに持っている心による判断を疎外してしまうだろう。彼は「定」や「執」をしばしば批判する。「經」もまた人間を執着するものとしてとらえられる。ここで批判されるのは儒家の「六經」のみではない。仏典なども同じ論拠のもとで、批判の対象となるのである。彼のこうした「經」への否定は言語批判としての面を持っているのである。そして彼は、非識字者の倫理的な行為を称揚し、士大夫を批判する。そして、言語が倫理的であるための必要条件ではないことを強調する。

第二節 読むことと学ぶこと

だが、かくも言語への不信を唱えた李贄は「讀書」を熱愛する人でもあった。李贄は「讀書」を肯定する言説を述べる時、餓えに対する食糧、病に対する薬といった、身体的なアナロジーで語ろうとする。これは人にとって肯定的な意味を持つ「讀書」がその人自身の衝動によって、突き動かされるものであって、一般化、普遍化できない事象であることを示すとともに、それが逃れようのない本質的に受動的な出来事であるはずだという考えを示すものでもある。「讀書」の本来のすがたは、すでに描写したように餓えや病に対する癒しのように、己がある状況のなかで、学ばざるをえないものを学び、読みとらざるをえないものを読みとる。そういう一回性の出来事にほかならない。

第三節 書くことと教えること

ではかれは書くことや教えることについてどうとらえるのか。李贄は「古之聖賢」は「發憤」しなければ書かなかったと説く。それは、寒いときに震え、病にあって呻吟するように書くということなのだ。「讀書」を語るときに用いられた餓えや病に続いて、ここでも身体的なアナロジーが用いられる。寒さも病も自ら選び取られるものではない。そしてそれは己のうちに到来し、それを引き受けることができるのもまた己だけであるような出来事である。これもまた、受動的な出来事が契機となつてのやむをえざる行いであると考えていいだろう。

窮極的に「學」は沈黙のうちにある。言語はそこに到達することができない。それを状況に応じて語ろうとする。いきおい本質は同じでも、表現は複数にならざるをえない。状況のなかで表現は複数性を持つ。聖人の語についても、李贄はおそらくそのようなものとしてとらえていた。彼はこれを顔の比喻によって述べている。

内なる沈黙と結びついた言語は内なるものと紐帯を持つ。そして、誰かの吐いた肺腑の言は、誰かの内に入る可能性を持つ。彼はこうした疎通の可能性を語るとき、身体的な反応へのアナロジーを用いる。寒さに凍えるように語り、渴きに喉を潤すように読むこと——止むに止まれぬ衝動のなかで言語に対峙する時、疎通は可能になるだろう。彼は言語が本質的に持つ不確実さや、状況如何と無縁な一定化の傾向——それらの弊害を認識しながらも、言語

による伝達の可能性に抗しがたい誘惑を感じていた。

第二章 師弟観

第二章では、その師弟観について論ずる。李贄において内なる自己と外なる他者との間には本質的な次元の相違がある。彼は師弟を相互的な社会関係としてとらえず、極めて非対称的な捉え方をする。本章では「師」と「弟子」双方のパースペクティブから、それぞれの意味付けを分析するとともに、師弟に対する李贄の態度を考察する。

第一節 師になるということ——自任への批判

彼は師の地位に身をおくことを拒絶する。師という立場は、まさに〈断絶〉をもたらすものに他ならないとみなす。彼の師たることに対する批判は概ね二つの論点を持っている。第一に、当時の腐敗した師弟関係への批判であり、利益集団としての師弟への批判である。そして第二に「著書立言」への批判、すなわち学者の「心」をさまたげる言語を創り出すことへの批判である。孔子、老子、釈迦といった彼の信ずる聖人たちは、こうした欠点から注意深く切り離されている。彼らは師たることを潔しとしなかったが、逼られて師となったに過ぎなかったとみなされる。

第二節 弟子になるということ——好学から奔走へ

李贄は孔子と顔回の関係に師弟の「實」をみる。顔回の「好學」の裡に、彼はこの〈断絶〉を乗り越えるものを見出すのだ。そして、生涯弟子たることを説き、師を求めて奔走する。奔走は言うまでもなく〈断絶〉に急迫されてのこと、〈継承〉を求めてのことである。「奔走」の目的は「有道」に師事することにあるが、「有道」は、その基底において「好學」であるような人物として描出されている。顔回が「好學」の人であり、なおかつ「弟子之實」を体現する人であったことはすでにみたが、ここにおいては師弟の関係は「好學」の人同士の関係として示されているのである。師となることなどは求めぬ、「好學」の人こそが、師たるべき人なのであり、学ぶ者はかくの如き人を求めねばならない。ここで師弟は、相互的な社会関係ではなく、「好學」にして奔走し、常に弟子の位置に身を置く人の境涯にのみ出現するものであるかのようなのである。

第一章と比較して読む時、彼の〈断絶〉と〈継承〉をめぐる思惟の構造はより明瞭なものとなるだろう。

第三章 死生観——死へのおそれから死の選択へ

第三章では、死生観について論ずる。本章では李贄の死生観を、死をめぐる感情的基盤から原理、そして実践に至る三つの層にわけて考察を試みたい。彼の死生をめぐる思考は錯綜

し、「名」の問題等について一見すると矛盾した様相を示すが、これは死生観をめぐって、少なくとも三つの並行した問題系があり、相互に関係しつつ、同時多発的に展開されていった為であると考えられる。本章の目的はその布置と脈絡を明らかにし、その思想構造を浮かび上がらせることにある。

第一節 死を恐れることと名を好むこと

死生観は一見すると〈継承〉と〈断絶〉の問題と関わらないように見えるかもしれない。だが、李贄においては死への恐れこそが学問に対する最も根源的かつ、本質的な動機と看做されている。死は、あたかも餓えや凍えの如く、他者によって担うことのできない、他ならぬ己につきつけられた事象といえようが、学の起点はここに据えられるのである。

第一節 死を恐れることと名を好むこと

李贄は死を恐れ、死を超脱すべく学に向かった。死への怖れは、むきだしの己を露わにする。生死は己で引き受ける他のないものだからである。彼はここに自らの学の基盤＝方法を見出していたように思われる。李贄は死への怖れを聖人も共有すると信じた。そして儒家伝来の「好名」の教法を「虚名」に繋がるものとして批判した。

第二節 死を無化する原理——如何に死への怖れを超えるか

彼は原理と実践の両面から死に対峙する。これら二つの層と、基層としての死の怖れとは、共鳴し合いながらも、互いに並行した流れをなす。李贄は死の怖れを超克すべく、道家、釋家の語を用いながら、生死という枠組を抜け出し、生死を共に無化するが如き原理を求めていくだろう。併し史書への没頭のうちに死者達と語らい、そこに知己を見出し、経世を軸としつつ、更に様々なる死のあり方に関心を抱いていた李贄は、死生の原理的な理解のみに満足しえなかった。

第三節 死を前にした実践——死に意味を持たせること

彼は死者達が如何に死んだかを跡づけ、値踏みし、一回的かつ史的な事件としての死をどう扱うかを思索する。「五死篇」はこうした事件としての死に対する彼の態度を端的に表したものだといえよう。ここでは『藏書』がある程度客観的な経世論の性格を持つが故に抑えられていた、個体の死が強く打ち出されている。彼はこの層に於て社会的に意味ある死を求める。そして「名」は事功と結びつき、俄然輝きを帯びはじめる。彼が否定したのは「虚名」であって「名」そのものではなかった。死を怖れたはずの彼は、遂に屈原の如く自ら選び取られた死を称揚するに至る。

第四節 死者としての自己——書物に潜む死者

そして自らの死をも、嘗ての死者達の死に重ね合わせる——そこには言語によって描き

出されるであろう死者としての自己への自意識が垣間見られる。

彼は自らの死を歴史上の人物の死に擬えつつ、自らの死を意味あるものにしようとする。ここには李贄独特の〈継承〉の有り様が示されているのである。

第四章 人物論再考——歴史への自己投影をめぐる

第四章では、人物論をめぐる、歴史への自己投影を中心に論じていく。前章において死をめぐる、歴史上の人物への自己投影に言及したが、ここではより幅広い見地からこの問題を扱っていく。

第一節 歴史への自己投影

近世儒者の修養論＝工夫論は、〈自己〉を起点とし、如何に聖人に到るかを問う。修養論＝工夫論は、方法であり、技法である。方法は方法である限りにおいて、それは再帰し反覆するものでなければならない。修養・工夫の技法が万人のものであるための前提として語られるのは、多くの場合、人と人との類似である。修養・工夫論は人間の共通性から出発し、その方法論を組み立てる。それは方法であり、技法である以上、反復可能なものである。

だが、ここにはもう一つの問題が生じる余地がある。それは〈自己〉は果たして、万人とどこまで似ているのかという問題である。人が個別的で多様な存在であるのならば、修養・工夫も個別的で多様なものになるのではないか。この方向で思考を進めていくとき、方法・技法としての修養・工夫論は成立し難くなってくるだろう。そうなれば自ずと〈自己〉をめぐる物語は別の仕方では語られなければならないはずだ。

李贄は人＝資質と時＝情況の二つの軸から、人々の多様性を捉える。万人向けの修養・工夫論に収斂されない、歴史への自己投影に基づく自己の物語を語っていく。

第二節 情況という重力

人々の資質と情況は李贄の歴史をめぐる思惟にとって、極めて重要な意味を持つ関数である。この両者は共に二面性を持っていた。即ち資質も情況も、客観的に見るとき、多様な可能性を許すものであると同時に、個別の事象に着目する場合においては、その働きを限定するものでもあるのだ。とりわけ「時」は、人々の行為を律する規律としても働いている。

『藏書』は天賦の資質と、所与の情況のなかで生きる人々の運命を類型化した書物といえるだろう。こうした類型化は、李贄自身の自己像の確立に決定的な影響を与え、一種の枠として作用しているように見える。彼はここに自分自身をもあてはめ、その運命を観測している。

そして「時」はまた、所与の情況を生きる人にとって、それに如何に対応するかを験すものだ。李贄は「時」とともに変容することを求める。「時」に対して人は受動的であらざるをえない。更にそれに適切に対応するかどうか、李贄においては一つの規範として機能している。刻々と変化する「時」に適切に対応することこそが、彼にとっては規範なのだ。変

化し続ける「時」はシンプルに明示できる規範ではありえない。だが、少なくとも彼が人々の行為について思考し、評価する基準になっている。

終章 時と出逢う言葉たち

終章では、前章で明らかとなった資質と情況という二つの軸を踏まえつつ、第一章でも論じた——〈断絶〉と〈継承〉をめぐる問題の核心たる——言語の問題を捉え直している。

第一節 越境する言葉たち

まず様々な言語の本質的な並列性を論じる。李贄は言語の表層的な性格、およびその分類に拘らない。ジャンルという面から言えば経書、史書、小説という全く別の言語に、彼は同様の性格を見るのである。彼が拘りをみせるのは内的なものとの紐帯とともに、言語の機能である。彼がしばしば強調するのは「經」ならざる書物の持つ「鑑戒」としての性格であり、「經」に通ずるような機能であった。

第二節 時と出逢う言葉たち

第二節では「時」と言葉の関係性について述べる。前章において、李贄における人々の運命が「時」と「人」という二つの関数によって収斂していくのを見た。この二つの軸はマクロな視線から見るとき、人々の多様な在り方への肯定であるが、ミクロな視線——個別の人々を見るとき、むしろそれぞれの運命を限定・規定する要素として働いていた。言語において李贄はしばしばアクチュアリティを求める。そしてここでも「時」はやはりプリンシプルとして働いている。

おわりに——言葉の海で

彼のこのような態度は、出版印刷が盛んになり、士大夫に多様な自己表現の場が与えられ、なおかつ政治的には危機的な状況が現出されていた嘉靖・万暦という情況と無縁ではない。彼の〈断絶〉と〈継承〉をめぐる問いは、明末というあまりに豊穡であまりに空虚な時代と深く結びついたものであった。

嘉靖・万暦年間において、士大夫の自己表現・内面世界の拡がりには空前のものとなっていた。過去のどの時代よりも多様な言葉が、行き交う時代であった。李贄のジャンルの多様性への容認は、こうした流れにある意味で棹さすものであったといえる。或いは迎合するものであったと評価されてもおかしくはないところがあった。

だが、彼の思惟は実のところ多様性の肯定にのみ止まるものではないのは既に見た通りである。嘉靖から万暦に至る時期は、まさに書籍出版の点数が急激に増大した時期にあたっている。この地の歴史において時間・空間を超えた言語がこれほどまでに氾濫したことは嘗てないことであった。その豊穡は恐らく最早肯定的にのみには語れない水準に達していた。

豊穰のなかで人々は、何を信じ、何を行うべきか、選択に迷い、時には何者も信じないようなニヒリズムをも生み出していた。そんな状況のなか、儒者たちの口からは焚書の再来を願う声すら屢々あがっていたのである。

李贄の態度は焚書の再来を願うような原理主義にも、全てを相対化するニヒリズムにも属さない。彼は言語に不信を抱いていたし、当時の出版・印刷の状況への冷眼においても人後に落ちなかった。だが、彼は自らの言語批判を踏まえつつ、古今の言語を受け止める態度を示す。彼は古今を超え、フラットに様々なる言語から真摯さや切実さを読み取り、表層における言語の類型にこだわらなかった。

李贄のこのような発想は、膨大なテキストに如何に対峙するかという同時代的な課題と無縁ではなかったように思われる。彼は豊穰がそのまま混迷に繋がるような状況のもと、原理主義にもニヒリズムにも偏らない新たな物語を語ろうとしていたのである。